

(2) 内需の動向

とすれば、当然の事ながら、第2のポイントは、こうした輸出の若干の鈍化を内需によってどれだけカバー出来るか、ということになりましょう。

① 設備投資

まず、昨年2ケタ台の伸びを見せた設備投資は、今年もその水準を持続出来るでしょうか。

確かに、昨年の投資の回復状況を見ると、初期は輸出に誘発された投資が大半を占めていました。しかし、その後は、素材産業、非製造業、中小企業といった非輸出関連業種に投資の主役が次第に移ってきています。

従って、設備投資が輸出動向に左右される度合は少なくなって来ていると見てよいでしょう。加えて、企業収益の増益基調、稼働率の上昇で、投資環境は良好持続と見られていることを考え合わせれば、今年度も設備投資は堅調な推移を辿るとみて差支えないでしょう。

② 個人消費

次に、家計部門はどうでしょうか。

こちらにも、上記の様な企業部門の活発化を背景に徐々に回復ピッチを強めています。

昨年の春闘の賃上げ率こそ前年並みに止まったとはいえ、雇用環境の好転に加え、残業代、妻のパート収入など所得は着実に上昇を続けています。更に注目すべきことは、わが国の雇用者全体を占めるといわれる中小企業勤労者の消費が漸く上向き始めたことです。このファクターは個人消費全体の回復をもたらすうえで必須条件ともいわれていますので、先行きを占ううえで好材料です。また昨年の全国的な豊作による農業所得の増加も、少なくとも心理的には明るい材料です。

この様に見てくると、物価の安定も手伝って、個人消費の回復は底固いものとみられます。

② 住宅投資

そのほか、住宅投資については、既に言われている通り、ストックが高水準にあるため大巾な増加こそ期待出来ないでしょうが、個人の所得が伸び、更には増改築意欲も高まっていることを考えれば、緩やかとはいえ、昨年を上回る伸びは期待出来るでしょう。

(3) 若干の懸念材料

この様に見てくると、比較的明るい材料の多い年ではありますが、勿論先行きに懸念材料がない訳ではありません。

国をあげての財政再建、行政改革の下、引続き財政支出に多くを期待出来ないことは、言うまでもありますまい。

また、VTRや鉄鋼にみられる様に、欧米諸国との貿易摩擦の再燃が懸念されるのも、気になるところであります。

加えて、物価の動向にも目が離せません。原油価格の低迷や、賃金コストの安定に支えられ鎮静状態を保って来た物価ですが、引続きその面では大きな変化はなさそうです。しかし、一方で稼働率上昇に伴う需給ギャップの縮小から卸売物価は、小巾ではありますが、上昇しつつあります。

この様に、いくつかの問題点があることは今後の景況の推移を見るうえで、充分頭の中に入れておく必要があります。

いろいろ述べて来ましたが、結論的にいえば、60年度の経済は「輸出の鈍化を設備投資を中心とする内需の回復がカバーする、という従来の外需主導型から内需主導型への移行を強めながら、昨年より少々低い成長率で安定的に拡大を続ける」と見てよさそうです。

3. 産業構造変化への対応

次に企業業績の面に目を転じてみます。

既に述べて来た様な景気拡大を背景として着実な回復を見せており、昨年暮、日本経済新聞社がまとめた全国上場企業（除く電力・石油）の60年3月期（通期）決算は、前年比7.7%の増収、22.2%の増益で、収益水準は過去最高を更新する見通しであります。

このような好業績の主役は、いうまでもなくエレクトロニクス関連産業ですが、これ迄低迷を続けた鉄鋼・石油化学・紙パルプなどの素材産業の回復も見逃がせません。

さて、新年60年の産業界も輸出の鈍化が心配されるものの、内需の拡大が期待出来るので全体としては増益基調を続けるでしょう。

もっとも、鉄鋼や石油化学などの素材産業では、貿易摩擦の激化や海外製品の流入圧力から再び業績の伸び悩みが懸念されますが、電算機やOA機器などの加工組立産業は引き続き好調が見込まれる、など業種間較差が再び拡大するおそれがあります。しかも好調業種でも、新規参入が相次ぎ、個別企業ベースでは需要の拡大が必ずしも収益に結びつきにくくなるという傾向が一段と強まりましょう。

この様に、今回の景気回復は、半導体などのいわゆるハイテク分野の急成長に象徴される様に、単なる「景気循環」的なものではなく、産業構造の急速な変化を伴ったものと言われています。

それぞれの業種・企業としては、これ迄にもましてコスト削減や販売力の強化といった地道な努力を重ねる一方、技術開発体制の強化・情報システムを軸とした経営戦略の見直しを図るなどの工夫が必要でしょう。

こうした新たな産業構造の変化に対する対応を進めるうえで、引続き増益基調が予想される今年は絶好の年であります。

 協同組合 金沢問屋センター

第31号 1985年1月発行

協同組合 金沢問屋センター

発行者 小川 甚次郎

金沢市問屋町2丁目61番地
電話 37-8585番



年 頭 の 辞

協同組合 金沢問屋センター
理事長 小川 甚次郎

明けましてお目度うございます。組合員の皆様にはお元気で新春をお迎えになられましたことを、お慶び申し上げます。

さて昨年はアメリカ経済の好転に幸いして輸出の好調とエレクトロニクスの先端産業の伸張にささえられて、マクロ的にはやや好況を見ましたが、反面、政府の財政投融资の沈滞は、住宅産業や公共投資の停滞、そして当地方に最も関係の深い繊維産業の極端なる不況と建設関係事業の落ち込みは、個人消費関連分野にも影響し、ミクロでは多くの問題を残した厳しい一年でありました。その中であって当センターとしては完成15周年を記念して計画致しました流通会館が国をはじめとして、県、市ご当局の絶大なるご援助、そして組合員全員のご協力とご理解の下に昨年四月立派に完成致し、予想以上の業績を挙げ得ましたことは特筆すべきであり、あらためて関係の皆さまに対し心からお礼申し上げます。又、組合員の皆様には、格差こそあれ、業績を伸ばされた企業が目立った年でありました。

本年はアメリカ経済の停滞が予想され、経済摩擦の問題が再燃するのではないかと懸念されているため更に厳しい年になることを覚悟せねばならないと思います。しかも高度情報化社会は流通機構にも大きな変革をもたらそうとしており、当団体としても如何に対処するか大きな課題となっており、近代化研究会は勿論企画委員会に於

でも既に研修会等を通じて勉強中ですが、県が推進している金沢コンベンション都市化対策、或は金沢市のテレポート構想におけるモデル都市の名乗りに応じ、私達はこの流通会館を本拠として、金沢市の物流の中心としての団地運営の基盤を確立する年であります。組合員の皆様方にはいよいよ消費者のニーズは多様化、個性化している新しい時代に対応して、小回りのきく特徴を生かし、変化に機敏に対応すべく情報の入手、分析、対応等、衆知を集めて時代を先取りすべく流通会館を中心としての利活用、運営によって、いよいよ当センターの発展と組合員各企業の繁栄、発展を期する所存であります。

終りに臨み皆様方のご健勝とご多幸ご活躍の程を祈念致しまして、新年のご挨拶といたします。

'85 新年 互 礼 会

小雪のちらつく肌寒い日ではあったが、恒例の協金沢問屋センターの新年互礼会が、金沢流通会館において、来賓、組合員 250 名の参加の中で開かれた。互礼会に先だち、あぎなえるしめ縄も真新しい問屋神社において、組合員商社代表者の参加の中で、厳かに祈願祭がおこなわれ、お祓いを受けた後、全員が企業の安泰と繁栄を祈り玉串を奉奠し参拝を終えた。

新年互礼会は金子専務理事の司会ですすめられ、国歌斉唱の後、辰川申治副理事長より年頭の挨拶が申し述べられた。「昭和も還暦の60年の新春を迎え、寿とともに流通会館での第一回の互礼会が開かれることは喜ばしいことである。昨年はアメリカ経済の好調と、エレクトロニクス先端産業の好調な反面、繊維の不況、建設のおち込みと、ミクロな点では多くの問題を残して厳しい年であった。しかし、当流通会館は当局の援助と組合員の協力によって立派に完成され、問屋センターとしては予想以上の業績をあげた。各個々の組合員は業績の伸びに企業間格差はあったが、一名の落伍者もなく、売上高はやがて 3,000 億円にならんとしている。また、INS 時代を迎え、流通の中にも変革が生じつつある。問屋セン

ターの企画委員会や近代化研究会でも金沢テレポート都市構想、流通の変革等といった面で、物流の基盤の中心とすべく消費者のニーズの多様化と個性化の情報の入手と、これに対応すべく時代を先取りしてゆく研究が続けられている。問屋センターの発展と組合員の発展と参加者全員のご健勝とご多幸を祈る」と結ばれた。また来賓からは、中西知事、江川市長等から「新幹線の着工も決まり、交通革命の中での流通革命といわれて、問屋センターが異業種の集まりの中で、情報交換をしつつ、コンベンション都市構想をねらって、新しい情報機関を誘導しながら、駅西地区の大きな中心となって、発展努力をしていることは、金沢に一つの大きな力と産業の中心があることを誇りとしている」と祝辞があった。そのあと、国会議員奥田敬和氏、森喜朗氏、安田隆明氏等から金沢問屋センターならびに組合員への力強い励ましの言葉と、センターの魅力と力に対する期待の言葉が祝辞として述べられた。祝宴では、明日に向けて活力を爆発させていく企業集団として、金沢問屋センター各組合員の企業努力を誓いあって無事互礼会を終えた。



年 男 大 い に 語 る

還暦と丑年を迎えて



東和工業株式会社

社 長 南 川 善 智

新年おめでとうございます。

今年の丑年は「乙丑」(きのとうし)であり、伸びかかった芽が曲げられ押えつけられる見直し年であり、奇蹟がおきる年だそうです。

元旦に家族から「お父さん、還暦の赤い座ぶとんを贈るよ」と言われ、40年代の気持ちでいた私は短かった60年をしみじみふり返り感無量にひたつたお正月でした。私の終生の事業開眼は黒四ダム建設に従事し、標高 1,000 m、風雪吹き荒れる山間から木材運搬用ロープにつかまり黒部峡谷を眼下 500 m の上り下り、標高 1,700 m の山腹をくり抜いたほら穴生活、死者続出のなかで砕石設備完成の感激、当社設立のヒントを得た30年代でした。

七転八起九転した亡き父から得た反骨と独立心。

中国大陸生活で得た愛と情熱。

死のしごきの平海兵団で得た忍耐。

スポーツの戦いで得た精神。

光陰矢のごとし、人生は短い、若き青春の夢と熱情は心身の衰えと共に失せつつありますが、急展開される世代にとり残されないよう、生涯の幸と生きがい求め牛歩のごとく一步一步坂を登り続けたいと念願しております。

金沢問屋センターの青年諸氏が相愛互助の精神をもって雄飛活躍され、素晴しき次代を形成されることを信じ還暦丑年の御挨拶と致します。

飽 食 と 飢 餓



株式会社 丸信丸岡屋商店

社 長 丸 岡 信 一

1985年を迎えた現在“食、”という事についてあらためて考えさせられる時代になったと思います。毎

日、新聞紙上やテレビ等で報道される“飽食時代、”に表現される近代の食生活と、一方でアフリカを中心とする“飢餓時代、”という厳しい世界、いずれも1985年の現実であり姿であるといえます。これは“食、”というものが、人間にとって人類にとって最も大切であり基本的な問題であるということの意味するものだと思います。我々も1945年に食糧難時代を経験し、その時代は“胃袋の時代、”といわれたことを思い出します。食することそして生きるために食するという毎日の厳しさから脱し、成長経済時代に入るとともに“加工食品時代、”となり簡便食品、インスタント食品に代表される食生活の大転換期が到来しました。この成長経済時代が安定成長期になり、“食、”は手作り、グルメの時代、健康食の時代、等の色々な表現法とともに遂に“飽食時代、”という言葉が一般化されるに至りました。スーパー、デパートの食品売り場に見られるあふれるばかりの食品は“飽食時代、”を象徴するはなやかな姿といえましょう。一方に於いてアフリカを中心とする飢餓問題はあらためて人類の直面する“食、”のもつ厳しさを痛感させます。世界の人口問題そして食糧問題は確かに21世紀に向かって次第に厳しいものになることは既によく論議されているところです。現在の日本の“飽食時代、”は果してこれから永久に続き得るか、静かに考えてみる必要があります。

最近色々な意味からバイオテクノロジーが注目されております。毎日のバイオテクノロジーの進歩はすばらしく、この技術が科学として食品、医薬、化学等の分野で大きく発展を続けることでしょう。バイオテクノロジーは生命工学といわれる技術で生命の営みや生体の動きを利用し、さらに生物資源を利用する技術です。当然食品工業は広い意味のバイオテクノロジーの技術を用いた産業と思います。

昔から酒、味噌、チーズ、パン等、酵母を中心とする微生物を利用して農畜水産物を加工して人類は生きるよろこびを謳歌してきました。これらは醸造、酸酵ともいわれた技術、産業であった訳ですが、これらの技術は大きく進歩し細胞融合、組織培養、動植物細胞の大量培養、遺伝子組み替え、バイオリアクター等広い発展をみせております。これらは食品産業に関係している者に大きな夢をいだかせてくれます。食品加工に適した農産物、気象条件に強くまた病気に強い農産物、栄養価の高い味のよい農畜水産物を求めて研究はたゆまなく続けられています。外国依存の高い日本にとってこの技術は新しい方向に産業を発展させてくれると考えております。

“飽食と飢餓、”一方に於いて技術は日毎に新しく

進歩して行きます。

当社は金沢問屋センターに移転以来、約20倍の成長を遂げました。

しかしこのような環境の推移、技術革新の速い時代の流れの中で私共の会社を今後とも発展させるにはどうすればよいか、大きな課題と思います。

当社は今年の基本方針として“健全経営”、“真心の奉仕”、“理想の職場”、“向上発展”を定め併せて報連相運動（報告・連絡・相談）を推進して活力ある企業に会社一丸となって取組むことに致しました。

牛に関係の深い商品の取扱が多い会社で、牛年の社長が牛年にあたってことは家業から企業への転換の元年にしたいと思っております。



「美しいものの、悲観なし」

島崎株式会社
社長 島崎政幸

新しい年、昭和60年は人間でいえば“還暦”です。一万円新券の福沢諭吉は幕末から明治維新への大転換を体験して“一身二生”、という名言を残しました。この様な意味で今年はどう生まれ変わるか。

今年はいし年ですが、丑というのは初めという意味で紐という字は牛を使って物事を作りだすこと。又、丑の字の原形は右手を表わす又の字に仕事をす一本の棒を付けたもの。つまり仕事を始めるという意味が込められていると言われております。この様な意味でまさに生まれ変わるにふさわしいエトです。

和装業界に於て、きもの離れが言われて久しいものがあります。たしかに街を歩いた時、きもの姿の女性が見当らない事を一番感じるこの頃であります。この様な現状を今後どう考えていくか。このままではきものの愛好者が更に少なくなるのではなからうか。

この最大の原因は、時代と共に日常生活に於てきものは不合理であり、非経済的な点にあると思われる。洋服はその点では、現代生活にマッチし合理的である事は皆がみとめる所ですが、世界の人々は日本のきものこそ、世界の民族衣裳の中でニューファッションの商品であると日本女性のきもの姿を賞賛しています。

しかしながら、我々日本人は最近特にファッションといえば洋服からとしか考えず、きもの持つ良さを忘れかけているのが今日この頃です。本年は我々業界人が誰れが日本女性をその様にさせたか、真剣にこの原因について反省すべき大切な年であると思います。きものの流通ルートが多様化をもう一度原点にもどり正常化出来れば和装きもの前進は、決して悲観する必要はないものと思われます。

年男の課題



株式会社 永井商店
専務 永井外志明

私は大学半ばで大阪に見習いに行き、家業の履物卸業を継ごうとしたのは、23才の時でした。

私は次男坊で、家業を継ぐなどとは考えてはおらず、私の商売の第一歩は「仕方なく」という言葉で始まりました。

大阪で3年、一通りの商売を習い、金沢で実行したところ、まず第一に当たった壁は、金沢と大阪の地域差ということでした。大阪の商売はそのまま金沢で適応しないということを知り、悩んだ時期もあり、父である社長と口論が絶えず、手さぐりに自分なりの商売を探し求めてきました。

その後、近代化研究会に入会し諸先輩方のお話、又各先生方の講話を聴かせて頂き、諸先輩方はそれぞれ自分なりの地域、現状に合った実践商法を見出されている事を知りました。それぞれ会社のリーダーとして現状を把握し会社を導いているのだと感じ自分もしっかりしなければと思わずにいられませんでした。これまで、私の商売の考え方は小売店に自社商品を数多く売るか、どうしたら小売店に気に入られるセールスマンになるかという事だけでした。しかしこの考え方はどこか違うと思う様になったのは、市内廻りをして3年目頃からでした。今の自分の考え方はこれでいいのか、これで時代に対処できるのか、もっと広い視野に立って見る必要があるのではないか、又商売の考え方の基準はどこに置けばいいのか、私の疑問は次々と深まってゆきました。

そんな時、近代化研究会のPHP一泊講座に参加し、商道とは本来どうあるべきなのか、企業は社会に何をなすべきなのか、という事を教えられ、私の疑問は少しずつ解消されてゆく思いがしました。

私も商売というものを知り13年目、商道を極めるにはまだまだ未熟ですが、今年は年男でもあり、商売の上でも大きく飛躍したいと考えています。今だに実践に移せない自分の理念を見出す事を今年の課題とし頑張るってゆきたいと考えています。



年男に思う



小川株式会社
常務 小川利郎

本年、私は36才、3まわり目ということで年男にあたります。ましてや男にとって、又経営者にとって36才～45才位までの10年間は大変に重要な時期であると認識しますし、又40才になれば世間一般では“あいつは若かったから”では通用しなくなると思っています。私事でおこがましい話ですが、昨年から今年にかけて私の父が病気になるたり、私が金沢青年会議所の本年の理事長の指名を受けたり、そして会社が創業70周年にあたるという3つの事が一緒にな

昭和60年度経済の見通し

三菱銀行金沢支店
支店長 小出真市

1. 昨年を振り返って

まず、昨年のわが国経済を振り返ってみますと、種々の問題点を内蔵していたとはいえ、着実に拡大を遂げた年であった、といつてよいと思います。

後に述べる様な、一昨年から米国経済の拡大を背景とする輸出の急増で幕を開けた昨年は、その輸出が引続き好調を持続する一方で、設備投資を中心とする内需も次第に回復の度合を強め、企業収益も過去最高水準に達するなど、業種間、地域間のバラツキを残しながらも、物価の安定にも助けられ拡大の道を歩んで来ました。

この結果、59年度の実質経済成長率は5.5%と、54年度以来5年振りの5%台に達すると見込まれています。

それでは海外の動きはどうだったでしょうか。これも全体として、まずは順調な景気回復を遂げたといつてよいでしょう。

まず、その主導的役割を果たした米国経済は、所得税減税を主因とする家計部門での需要急増が、次第に企業部門にも波及し、昨年は設備投資が久々に2ケタ増を記録するなど、昨年通年での実質GNP成長率は6.7%(暫定値)と、1955年以来の高成長が見

って大変に苦慮致しました。しかしやはり物は考えようで、私は“これは神様が私に与えてくれた試練だ、又チャンスだ”と考える様にしました。

人間だれしも人生の中でいろいろな節目に出会うと思います。その節目節目をスプリングボードにするかしないか、又出来るか出来ないかは大変重要な事だと思ひます。

本年は1985年、21世紀まで15年、この15年は政治経済のみならず、ニューメディアの発達や又次代の我々の日本、又ひいては我々の企業を背負う子供の教育問題等いろいろ世の中がめざましく変化するであろうと思ひます。私は21世紀に向けて自分の資質の向上をベースに“やる気、勇気、根気”をモットーに“己を大切に、企業を豊かに、そして家庭を暖かく”をモットーに人間関係を大事にしながら、この1年というより21世紀までを大事に生きていこうと思ひます。そして21世紀を素晴らしい時代に、青年の1人としてしたいと思ひます。

込まれています。こうした予想を上廻る米国景気の回復が、前年比3割増という輸入急増をもたらし、わが国をはじめ欧州主要各国共、対米向けを中心に輸出主導による景気回復を実現させたという訳です。

2. 今年度の見通し

この様に、内外共に拡大基調で迎えた60年度のわが国経済の見通しはどうでしょうか。

(1) 輸出の動向

それを占う第1のポイントは、言うまでもなく、わが国の景気を支えてきた輸出の先行きを大きく左右する米国経済の動向であります。

この点については、幸いにも米国景気が一頃の勢いを失ったとはいえ、春先には再び拡大テンポを回復すると見込まれており、今年も、昨年前半の様な事態は望めないとしても、着実に拡大を続ける、と見てよさそうです。賃金や輸入物価の安定によりインフレの懸念はなく、また企業の設備投資意欲も引続き根強いからであります。

従って、予想されるわが国の輸出の落込みは、比較的軽微なものに止まり、60年度中は、景気の主役にはならないとしても、少なくとも下支えする役割は果たすものと見られます。